スゲナシ考

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2001-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 光浩 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1394

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

スゲナシ考

吉田光浩

はじめに

（大内記は）世のひがものにて、才のほどよりは用ゐられず、すげなくて身貧しくなむありけるを、御覧じ得る所ありて、かくとりわき召し寄せたるなりけり　（源氏物語　をとめ）

右は、源氏の息子夕霧の学問の師となった大内記という人物について語られた部分である。変わり者で学才の程には重用されず、貧しい生活を送っていた男であったが、源氏に見いだされて召し出された旨が語られている。夕霧は、大学寮の試験の予行試問に卓抜した才能を示し、この人物は、源氏の前で、その学問の師としての面目を施すという一節である。

ここでは、その大内記の人となりを語る語として形容詞スゲナシが用いられているが、この部分については、幾つかの異なる解釈が認められ、未だ定説と呼べるものが見当たらない。そして、その原因は、形容詞スゲナシの成立と語義の問題に由来するものと考えられるようである。

本稿は、この形容詞スゲナシについて、その成立と史的展開を考察しようとするものである。したがって、類義語であ

るツレナシや後代のソッケナイとの関係については、今回、言及しないことにする。

一

上記の箇所の「すげなくて」について、本居宣長『玉の小櫛』では、次のように記されている。

a　此詞、ここにかなへりとも聞えず、もしは上にたもじなどありしが、落たるにや

（『増補本居宣長全集』第七巻六九八頁）

つまり、スゲナシは、この箇所の用語として不適切であり、タスケナシ（助け無し）のタが脱落したものではないかとする見方である。

この説は、現行の注釈書にも採用するものがみられる。例えば、日本古典文学全集本（小学館）頭注では、『玉の小櫛』の上記箇所を引いて、「（援助者がなくて）の意とする」と注されており、新編日本古典文学全集本（同）頭注においても「人づきあいが下手なの意か。ただし、『玉の小櫛』では…」と改訂が加えられているものの、やはり、『玉の小櫛』を併記する形で引いている。

しかしながら、もし、仮に宣長の言うように「タスケナシ」のタが脱落したものであるのならば、諸本のいずれかにタスケナクとある本文があり得て良いものと考えられるが、この箇所については、目立った異同は認められず、いずれもスケナクと読めるのであって、文字の脱落は考えにくい。また、タスケナシという複合形容詞は『源氏物語』の他の部分にも見当たらず、ここは、やはりスゲナクとして解釈を進めることが妥当であるものと考えられる。

一方、新日本古典文学大系本（岩波書店）脚注では、「人づきあいもわるく」と解釈されており、「『すげなし』は、相手と感動を分かちあわない気持」と説明されている。また、日本古典文学集成本（新潮社）では、「顧みられず」との解釈が

記されており、これも、上記諸注釈とは異なりが認められる。

このように、この部分の解釈については、現行の注釈書においても一定せず、幾つかの異なった捉え方がされているようである。

一方、現行の辞書にみられるスゲナシの扱いについて検討すると、『日本国語大辞典（第一版）』（第二版については、本稿執筆時点で未刊）には、次のような二つの意味区分が設けられている。

①愛想がない。つれない。そっけない。思いやりがない。薄情である。冷淡である。

②あまり美しくない。

①は、中古以降、多くの用例に見いだされるものであり、有情の対象である人の態度や行動の有様を状態的意味において捉える語義である。また、②は、日葡辞書に「suguenai qi（すげない木）」とある例等、主に中世以降に見いだされるものであり、非情の対象であるモノの有様を、評価的意味において捉える語義である。また、『角川古語大辞典』は、①に該当する項目のみを記述しており、②に該当する項目は設けられていない。『古語大辞典』（小学館）も、①に該当する項目は見られるが、②に該当する項目がなく、代わりに「頼りどころもなく心細い」意を表す項目を設けて、そこに冒頭の『源氏物語』少女巻の例と、次の[注1]『栄花物語』の例が併記されている。

b　（帝は御帳台から）とみに出でさせ給ふまじき御けしきなれば、殿（道長）入らせ給ひて、「夜に入り侍りぬ。かばかりおもしろき遊びども御覧ぜん」と申させ給ひければ、「（中略）さまざまの舞どもは皆見侍りぬ」と、いとのどかに宣はすれば、すげなくて出でさせ給ひぬ。

（栄花物語　巻十一　つぼみ花）

ここは、道長が、帝に御帳台の中宮妍子と姫宮（禎子）の傍から退出なさるよう促す場面である。ところが、一向に帝はお聞き入れにならない。やむなく道長はその場を離れるのである。日本古典文学大系本頭注に「とりつくしまもなくて」とあり、やはり①②いずれの語義でも解釈が難しい。したがって、この語の語義については、一旦、語の成立の問題から

整理して考察しておく必要があるものと考えられる。

二

古代におけるスゲナシの語義を説明するためには、この語の成立の経緯について検討しておく必要があろう。例えば、『大言海』・『古語大辞典』（小学館）など、多くの辞書[注2]では、上代に用いられたスカナシから語形変化を経てスゲナシが成立したものとして捉えている。一方、『上代語辞典』では、「『加』は清音（カ）の仮名であるが、万葉の仮名遣は、必ずしも厳格ではなく、ここでは濁音（ガ）に読むべきであろう」と記述され、スカナシではなくスガナシを項目として掲げている。後者の説に従うとすればスガナシからスゲナシに変化したということになり、母音交替の例として捉えられるのであるが、前者の説の場合、スカナシからスゲナシに転ずるには、第二音節の子音・母音のいずれも交替する必要があり、後者の説に比べて若干の隔たりが感じられる。したがって、ここでは、スゲナシを巡る語形上の問題について考えておきたい。

万葉仮名で記されたスカ（ガ）ナシについては、次の三例が知られている。

c　嘍囉　獨坐不楽皃　須加奈志　乎佐奈志　又　佐久〻志　（天治本新撰字鏡）

d　心にはゆるふことなく須加の山須加奈久のみや恋ひ渡りなむ　（万葉集巻第一七・四〇一五）

e　菅の根の須加名須加名支ことを我は聞く我は聞くかな　（催馬楽・葦垣）

ここにみられる「須加奈志」の第二文字には、いずれも「加」が用いられている。これについて『日本書紀』では、清音のみに用いられる仮名であることが、夙に大野晋氏[注4]の調査によって明らかにされており、また、その他の万葉仮名による資料においても清音の仮名として広く用いられていることから、通常スカナシと読めるのであるが、ここに挙げた『新撰

字鏡』『万葉集』『催馬楽』について検討すると、必ずしも清音に限らず濁音を表す仮名としても用いられている様子が窺われる。[注5]

例えば、『新撰字鏡』では、次例のように「加」が「我」と同じく濁音ガとして用いられたものと判断すべき例が認められる。

f　褁頭　加我不利須（カガフリス）

g　幞頭　加丶不利須（カガフリス）

この他にも、「何作　伊加丶世牟（イカガセム）」「眇　須加目（スガメ）」「霧　奈加阿女（ナガアメ）」「喎　由加牟（ユガム）」などの例がみられることからも、『新撰字鏡』において、「加」は濁音にも用いられる仮名であることが理解される。したがって、ここにみられる「須加奈志」についても濁音語形スガナシを視野に入れて検討しておく必要があるものと考える。

dの『万葉集』に用いられた「須加奈久」についても、通常の用字法からのみ判断するならば、やはりスカナシであると考えることが自然である。しかしながら、次例のように、『万葉集』においても、『新撰字鏡』の場合と同じく、「加」が濁音「ガ」として用いられた例が少なからず存在することを併せ考えると、スガナシであった可能性も否定できない。

h　たちこもの発ちの騒きにあひ見てし妹が（伊母加）心は忘れせぬかも　（万葉集巻第二〇・四三五四）

i　国国の社の神に幣まつり贖祈（阿加古比）すなむ妹がかなしさ　（万葉集巻第二〇・四三九一）

さらに、eにみられる「菅の根（須加乃祢）」は枕詞として繰り返し古歌に詠まれており、そこから考えると、この場合の「須加乃祢」はスガノネで「加」は濁音ガとして読むべきものと考えられる。したがって、その後の「須加名須加名支」の「加」についても濁音として、スガナスガナキと読まれたと考える方が理に適っている。このため以上のような問題を併せ考えると、語形は第二音節が濁音のスガナシであったとすることが自然であると思われる。

スガナシは、その後、三巻本『色葉字類抄』に「嘍囉　スカナシ」、観智院本『類聚名義抄』に「嘍囉　…スカナシ…（…は省略部分があることを示す）」（佛中二七）、「嘻…スカナシ…」（佛中六〇）、「魯…スカナシ…ニフシ　マフシ…」（佛中六一）など、濁声点の付かない形で見いだされるが、『名義抄』の「魯」に本来濁声点が見られるべき「ニブシ・マブシ」が「ニフシ・マフシ」となっていること、また、後代のものとなるが、内閣文庫本『倭玉篇』（慶長十五年版）に「囉　スガナシ」「魯　スガナシ」とあることなどから、やはり、スガナシとして捉えられていた可能性が高いものと考えられる。

なお、『今昔物語集』には、次例のように、スガナク・スゲナクのいずれであるか即断できない「菅无ク」が、みられる。

j　（陸奥守の一行は）木戸ヲ急ト閇（キ）テ、弃（タテ）テ入（ステ）ヌレバ、奇異（アサマシ）ク云甲斐（イフカヒ）无（ナク）テ、返ラムズルニモ霞（カスミ）ニ立（タチ）テ秋風吹（フクキ）ハ際ニ成ニタリ、菅无クトモ国ニ暫モ可有（アルベキ）ニハ、被指出（サシイダサレ）ニタリ。

（今昔物語集　第二六巻　付陸奥守人、見付金得富語第十四）

これがスゲナクであるとすると、上記の『万葉集』および『催馬楽』『新撰字鏡』以後、スガ（カ）ナシは、管見の限りにおいて、辞書以外の文献から見いだし得ないことになる。一方、スゲナシは、中古から仮名文に用例をみることができるようになるが、辞書には、古本節用集あたりから記述がみられるようになる。したがって、スガナシは、辞書には後代にも記述がみられるものの、それは『新撰字鏡』など先行する資料の記述に影響を受けた前代の名残りであって、実際には、中古以降スゲナシに交替していったものと考えられる。

三

上記において、検討したように、「須加奈志」がスガナシであるならば、スゲナシとの語形上の隔たりは、一層解消されるものと考えられる。すなわち、スガナシからスゲナシへの語形変化を積極的に考えることができるのであるが、語義の

面においては、その連続性を想定することが可能であろうか。ここでは、この問題について、暫く検討しておきたい。

やはり、明らかにそれと指摘できる万葉仮名で記された『万葉集』『催馬楽』『新撰字鏡』の上記の例を基に検討を進めることにする。前掲dの例は、「須加の山」の名のように「スガナク」思いつつ、逃がしてしまった鷹を恋い続けることであろうか、とする歌意であり、『催馬楽』の一節eは、ある疑いを受けた事に対する身の潔白を訴える部分で用いられたものである。したがって、両例に共通する部分は、自分が心理的なつながりをもっていたと考える相手に予想に反して背かれたり責められたりしているという状況すなわち事態であり、その事態を契機として生ずる寂しさ・嘆き・面白からず思う気持ちなどの感情が表現されている点である。また、天治本『新撰字鏡』の「獨坐不楽皃」については、享和本において「坐歎皃」とあり、これらの記述を「須加奈志」の語義と関係付けて良いものとするならば、「スガナシ」の語義については、次のように説明される。すなわち、心情を共有したい、あるいは共有すべきであると思う相手に思いがけず背かれたり、責められたりすることによって生じる心理的な疎外感を表すものであり、憂鬱で心楽しまない気持ちを表す感情表現であると考えられる。したがって、これらの例に見られるスガナシの語義については、疎外を受けることによって生ずる鬱々とした嘆きを表す「感情的意味」が表れたものとして統一的に捉えることが可能である。

一方、スゲナシについては、上代の例は見当たらず、比較的早いものとして次の『大和物語』の一例を挙げることができる。

k　この大徳の親族なりける人のむすめの、内にたてまつらむとてかしづきけるを、みそかにかたらひけり。親聞きつけて、男をも女をもすげなくいみじういひて、この大徳をよせずなりにければ、　（大和物語　一六八段）

ここに用いられたスゲナクについては、大切に育てようとしていた娘と身内として遇する一族の男（大徳）に裏切られた親の嘆き、怒りなどの心情が込められるべきところであって、スゲナシについて一般に宛てられる「そっけなく」「冷淡に」とする解釈では、違和感が残る部分である。日本古典文学大系本頭注では、「容赦なく」の意として解されているが、やは

りそのことを考慮して解釈に工夫が加えられたものであろう。この例については、上記のスガナシに見られる心情を共有すべき相手に裏切られたという状況・事態がある点で共通しており、そのような事態を契機として生ずる心理的疎外感を含意しつつ、大徳と娘に対して「どうしてこのようなことができるのか」と嘆きながら譴責する有様、すなわち状態を外面的に捉えて表現したものと考えることができる。したがって、すでに「感情的意味」ではなく、「状態的意味」で用いられた例と考えるべきであるが、スガナシの含意していた心理的疎外感については、この『大和物語』に見られるスゲナシに継承されたものと考えてよいのではなかろうか。

この他に、スゲナシは、『落窪物語』に一例、『宇津保物語』に三例、『源氏物語』に、冒頭例以外に三例、『和泉式部日記』に一例、『栄花物語』に二例、『狭衣物語』に三例等が用いられているが、いずれもおおむね『日本国語大辞典』の語義①にみられた「そっけない」「冷淡だ」などの意で解釈できるものが多い。

l　少輔はいとにくき物に思ひしみて、すげなくのみもてなしければ、来わづらひてなん有りける。

（落物語窪　巻之三）

m　（帝の桐壺更衣に対する）さまあしき御もてなしゆゑこそ、すげなうそねみたまひしか、（源氏物語　桐壺）

n　中将も、「天の岩戸さし籠もりたまひなんや、めやすく」とて立ちぬれば、（近江君は）ほろほろと泣きて、「この君たちさへ、みなすげなくしたまふに、ただ御前の御心のあはれにおはしませば、さぶらふなり」（源氏物語　行幸）

o　（春宮は）この殿をば、いとうち解けがたう恥しきものにぞ思ひ聞えさせ給へる。（狭衣は）いとすげなくて、「世の中の、ありにくくのみ思給へらるれば、『いかがはせん』とて、なま女の、あはれにしつべき、案内知らで、語らひより侍るぞ」と啓し給へば、（狭衣物語　巻四）

これらは、いずれも人の態度や行動を対象として、それが、聞き手もしくは周囲の人々と心情を共有しようとしない状態であることを表現するものである。すなわち、人の態度・行動に心理的な疎外感を抱くのであるが、ここでは、やはりス

ガナシに読みとれるような感情的意味が希薄化されており、ただ、人の態度・行動の有様を外面的に把握しようとする「状態的意味」で用いられているものと考えられる。

p　（北の方は、人々が）口ひそむも聞き知らず、上中下、すげなき遊びを、心ひとつやりてこと心なし。

（宇津保物語　忠こそ）

この例については、「遊び」に対して心情を共有できず、楽しめないという心理的疎外感を表すものと考えられ、「興が乗らず、あまり面白くない管弦の演奏」として解釈が可能である。すなわち、興味をそそらない具体的対象としての「遊び」が捉えられているのであって、そこには、事態や人の態度・行動ではなく、スゲナシが「モノ」として把握される対象語をとる萠しを窺うことができる。したがって、pは、主に中世以降に現れるスゲナシの語義②「あまり美しくない」意等のように非情物を対象とする評価的意味へとつながってゆく例と考えられる。

また、次の『かげろふ日記』の一例については、諸注釈において「そっけない」「薄情だ」などの解釈が採られているところであるが、これについても、同じくスガナシとの関連は指摘できるようである。

返りごとするを、親はらから制すと聞きて、まろこすげにさして、

q　うちそばみ君ひとり見よまろこすげまろは人すげなしといふなり

（かげろふ日記　巻末歌集）

この例に見られる歌は、道綱がある女性に対して書き送ったもので、女の一族が、すでに別の結婚相手がいることを理由に、自分（道綱）との文のやりとりを反対していると聞いて、寄越したものである。おおむねの歌意は「そっと横を向いてあなた独りで見てください、私のことはみなさんがスゲナシと言っているそうですから」とするものである。

一族として迎える娘の夫となる人には、ある意味で心情を共有すべき相手であることが望ましいのであるが、娘の親兄弟は、道綱に対して、そのような心情を共有しようとしない人物であると捉えている。少なくとも、道綱にはそのように見える、とするものである。諸注釈ではここを「つめたい」「薄情だ」「そっけない」とする状態的意味に解する場合が多

い。これらの解釈は、相手と心情を共有できないとする心理的疎外感が態度に表れたものと考えられ、一応、首肯されるのであるが、ここでは、スゲナシに「まろ（道綱）」についての非難とも言える「評価的意味」が表れている点に注意すべきである。この歌が、道綱の謙辞であるとすれば、「私のことは皆さんが、評判が良くないと言っているそうですから」あるいは「つまらない男だと言っているそうですから」など、さらに評価的意味が強く現れた解釈がこの場合にはふさわしいように思われる。

同様に、評価的意味が強く現れたと考えられる例に、次の『和泉式部日記』にみられる一例がある。

r　「あやしうすげなきものにはあれ、さるは、いと口惜しうなどはあらぬものにこそあれ」　（和泉式部日記）

ここは、外出を乳母に見とがめられた帥宮が、和泉式部について心中独白する部分である。講談社学術文庫本（上・三一〇頁）では、「諸注『和泉が（宮に）そっけない、愛想がない、つれない』の意に解するが、それではおかしい」との指摘があり、「あの女はふしぎと人からそっけなくされるものだな」と解釈されている。この指摘の通り、ここは「愛想がない・つれない」意では不十分と思われるが、上記の『かげろふ日記』の解釈が可能であるならば、「人からそっけなくされる」意よりも、むしろ「あの女は妙に評判が悪いものだな」とする解釈の方が、一層文意に叶っているように思われる。

この他に、スゲナシは、中世になると『源氏物語』の古注釈や辞書にも記述がみられるようになる。例えば、上掲mの桐壺巻にみられるスゲナウの注として、『河海抄』に「無人望（スケナシ）」、また、『仙源抄』に「無人望之由也」とある。用例mの解釈は、「冷淡に」が当てはまるため、「無人望」の記述そのものは、桐壺巻の場合のスゲナクの意味には直接関係がないものと思われるが、これに類する記述は、中世の辞書に多く見いだされる。例えば、文明本『節用集』には「無人（スケナシ）或作無詮方（スヘナシ）・又無人望（なしすけ）」、また『落葉集』には「無詮方（なしすけ）・無人望（なしすけ）」、などがみられる。これらの辞書の記述をそのまま語義に当てはめて考えることは慎むべきであるが、「無人望」「無詮方」等の記述がスゲナシの語義と関連をもつものであることは認めておく必要があろう。

すなわち、「無人望」「無詮方」は、周囲に受け入れられない状態、どうにも仕様がない状態などの「状態的意味」との関連を示唆しているものと考えられる。また、同様の例として、『伊京集』には、「無人気（スゲナシ）」が見える。「無人気」は、中古に見られる「ひとげなし」（一人前でない・人並みでない）との関連が考えられ、そこには、マイナスの評価的意味が顕在化することもあり得たことと想像される。

以上のような中世の古注釈や辞書の記述は、すでに述べた幾つかの用例の語義にも関係しているようである。例えば、用例b『栄花物語』の場合について検討すると、道長の苦心にも関わらず帝は御帳台から出ようとなさらない。すなわち、どうにも手の打ちようがなく心理的な疎外感を抱いて帝の御前から退出するのである。したがって、日本古典文学大系本頭注に見られる「とりつくしまもなくて」の意は中世以降の辞書に見いだされる「無詮方」の記述につながるものと考えられる。また、『伊京集』にみられる「無人気」の記述は、上述q『かげろふ日記』・r『和泉式部日記』の例に現れた「評価的意味」に関連するものと思われる。

おわりに

以上のように、スゲナシではなくスガナシから転じたものであり、その語義には、相手と心情を共有できないという心理的疎外感がその基本にあるものと考えられる。具体的には、「そっけない」「冷淡だ」などのような、人の態度・行動を対象に、それが心情を共有できない状態にあることを表現する「状態的意味」、さらに、そのような状態にある相手の態度・行動、あるいは人物や具体的な「モノ」を対象に捉えて、「評判が悪い」「つまらない」意等を表す「評価的意味」があるものと考えられる。また、「状態的意味」には、b『栄花物語』の用例にみられるように、事態・状況の推移を対象として、それが意のままにならないことを表す場合にも用いられることがある。

このような検討を踏まえて、再び冒頭『源氏物語』の例に戻ると、大内記にとって心情を共有すべき相手とは、自分の学識を認めてくれる貴族社会そのものであったことと考えられる。しかしながら、学識に見合ったほどには重用されなかったのであり、スゲナクテは、周囲から疎外され、華々しい貴族社会からうち捨てられた人物の境遇を示すものと考えられる。また、源氏の要請に応じて熱心に夕霧の教育に取り組んでいるところからも、決して冷淡であったり人づきあいが悪いという人物ではなさそうである。そのため、ここは、状況の推移が意のままにならないことを表す状態的意味が表れた解釈がふさわしいように思われる。したがって、「才のほどよりは用ゐられず、すげなくて身貧しくなむありける」は、「学識の程には重用されず、どうにも仕様がなくて自身は貧しく、日々を送っていたのである」という解釈が当てはまるものと思われる。

（注1）ただし、この箇所について富岡本では「すへなくて」とされており、スベナシの誤写である可能性もある。

（注2）『岩波古語辞典』に「スは接頭語、ケは気、ナシは無しの意か」との説が示されているが、「素気無」など、それに近い記述が現れるのは中世以降であり、後代の語源意識を反映する説である可能性が高い。

（注3）享和本『新撰字鏡』では、「須加奈加留」となっておりこれも第二文字には「加」が用いられている。

（注4）大野晋『上代仮名遣の研究』第四章五六頁参照。

（注5）先行する地名「須加の山」の詳細については未詳であり、そこから判断することはできない。

（注6）『古語大辞典』（小学館）スゲナシの項の語誌欄では、この歌を取りあげ、「孤独で淋しげな嘆きを表していて『すげなし』の本義を察すべき例である、従って、『源氏物語玉の小櫛』が（中略）源氏物語・少女の例文を誤写かと疑ったのは認めがたい」とある。先に述べたように、『玉の小櫛』の説に関する考察は、首肯されるが、その根拠となるこの歌に用いられたスゲナシの意味については疑問がある。歌意の全体としては、孤独で淋しげな嘆きを表していることには違いないが、この場合では、「人」が「すげなし」と「まろ」について評価するのであって、この場合、「すげなし」自体が嘆きを表しているものとは考えがたい。ここは、やはり、道綱に対する女側の一族から受ける評価的意味で用いられていると考えるべきではなかろうか。

（参考文献）

本居清造校注『増補本居宣長全集第七巻』昭和二年・吉川弘文館
大野晋『上代仮名遣の研究』昭和二八年・岩波書店
阿部俊子・今井源衛校注『日本古典文学大系大和物語』昭和三二年・岩波書店
河野多麻校注『日本古典文学大系宇津保物語』昭和三二年・岩波書店
高木市之助・五味智英・大野晋校注『日本古典文学大系万葉集』昭和三二年・岩波書店
土橋寛・小西甚一校注『日本古典文学大系古代歌謡集』昭和三二年・岩波書店
松尾聡・寺本直彦校注『日本古典文学大系落窪物語』昭和三四年・岩波書店
山田孝雄・山田忠雄・山田英雄・山田俊雄校注『日本古典文学大系今昔物語集』昭和三四年・岩波書店
松村博司・山中裕校注『日本古典文学大系栄花物語上』昭和三九年・岩波書店
三谷榮一・関根慶子校注『日本古典文学大系狭衣物語』昭和四〇年・岩波書店
京都大学文学部国語学国文学研究室篇『新撰字鏡（増訂版）』昭和四二年・臨川書店
玉上琢弥編『源氏物語評釈河海抄』昭和四三年・角川書店
中田祝夫編『古本節用集六種研究並びに総合索引』昭和四三年・風間書房
阿部秋夫・秋山虔・今井源衛編『日本古典文学全集源氏物語』昭和四五年・小学館
中田祝夫編『文明本節用集研究並びに索引』昭和四五年・風間書房
中田祝夫編『中世古辞書四種研究並びに総合索引』昭和四六年・風間書房
石田穣二・清水好子校注『日本古典文学集成源氏物語』昭和五一年・新潮社
小島幸枝編『耶蘇会版落葉集総索引』昭和五三年・笠間書院
小松登美校注『和泉式部日記（上）全訳注』昭和五五年・講談社
前田育徳会編『尊経閣蔵三巻本色葉字類抄』昭和五九年・勉誠社
正宗敦夫編『類聚名義抄』昭和六一年・風間書房
今西祐一郎・藤井貞和他校注『新日本古典文学大系源氏物語』平成五年・岩波書店
阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注『新編日本古典文学全集源氏物語』平成六年・小学館

上村悦子編『蜻蛉日記解釈大成八』平成六年・明治書院
岩坪健編『源氏物語古注集成21仙源抄』平成一〇年・おうふう